

スケーエン デンマークの芸術家村

国立西洋美術館・新館展示室（東京・上野公園） 2017.02.10～05.28



「スケーエン(Skagen)」とは、デンマーク語で「岬」の意で、デンマーク・ユトランド半島最北端に位置する風光明媚な港湾都市で、潮風が舞う白い砂浜にどこまでも広がる空と海がある独特の風土の自然の豊かさが美しい自慢の場所である。

この地では、19世紀後半から20世紀初頭には「スケーエン派」と呼ばれる多くの北欧からの画家に、詩人、作曲家などが集まる「国際的な芸術村」として知られるようになり、「スケーエン」を制作する拠点として発展した場所である。

画家たちは、フランスに発祥してヨーロッパ絵画の新しい潮流となっていた自然主義の考え方で、漁師たちの労働、浜辺の風景、素朴な村人たちの生活、芸術家とその家族の日常を題材とした作品を数多く描き、当時のデンマークの美術界に「近代の革命」と呼ばれる転換をもたらし魅力を放っている。

本展は、「デンマークと日本の外交関係樹立150周年」を記念して開催される催事で、「スケーエン美術館」所蔵「59点」の作品により、デンマークの近代美術を代表する「スケーエン派の絵画」のあらましを紹介・展示しており、常設展（今回は「シャセリオー展」）の鑑賞券で入場することができる特典がある。

< 展覧会の見どころ >



スケーエン派を体表するペーダー・セヴェリン・クロヤー《スケーエンの南海岸で魚網を引く漁師たち》(1882年)は、その青みがかかった空を背景に、浜辺で働く漁師の姿が描かれている。当時は、自然を相手に格闘する人々の力強い姿として、19世紀後半の自然主義絵画では頻りに描かれた題材である。

ペーダー・セヴェリアン・クロヤー《ばら》(1893年) (ポスターの写真)、
その他

ミカエル・アンカー《ボートを漕ぎ出す漁師たち》(1881年)

アンナ・アンカー《戸外の説教》(1903年)

マリー・クロヤー《縫い物をする女性のいる室内》(制作年不詳)などの作品。